

# 大豆管理情報 (第3号)

## 1 気象経過

### (1) 気温

6月の平均気温は 21.4℃ (平年差+0.5℃) と平年並みだった。

7月の平均気温は 25.5℃ (平年差+0.6℃) と平年並みだった。

### (2) 降水量

6月の降水量は 206.0mm (平年比 113%) と平年より多かった。

7月の降水量は 144.0mm (平年比 58%) と平年より少なかった。

### (3) 全天日射量

6月の平均日射量は 17.1MJ/m<sup>2</sup>/日 (平年比 106%) と平年並みだった。

7月の平均日射量は 15.9MJ/m<sup>2</sup>/日 (平年比 99%) と平年並みだった。

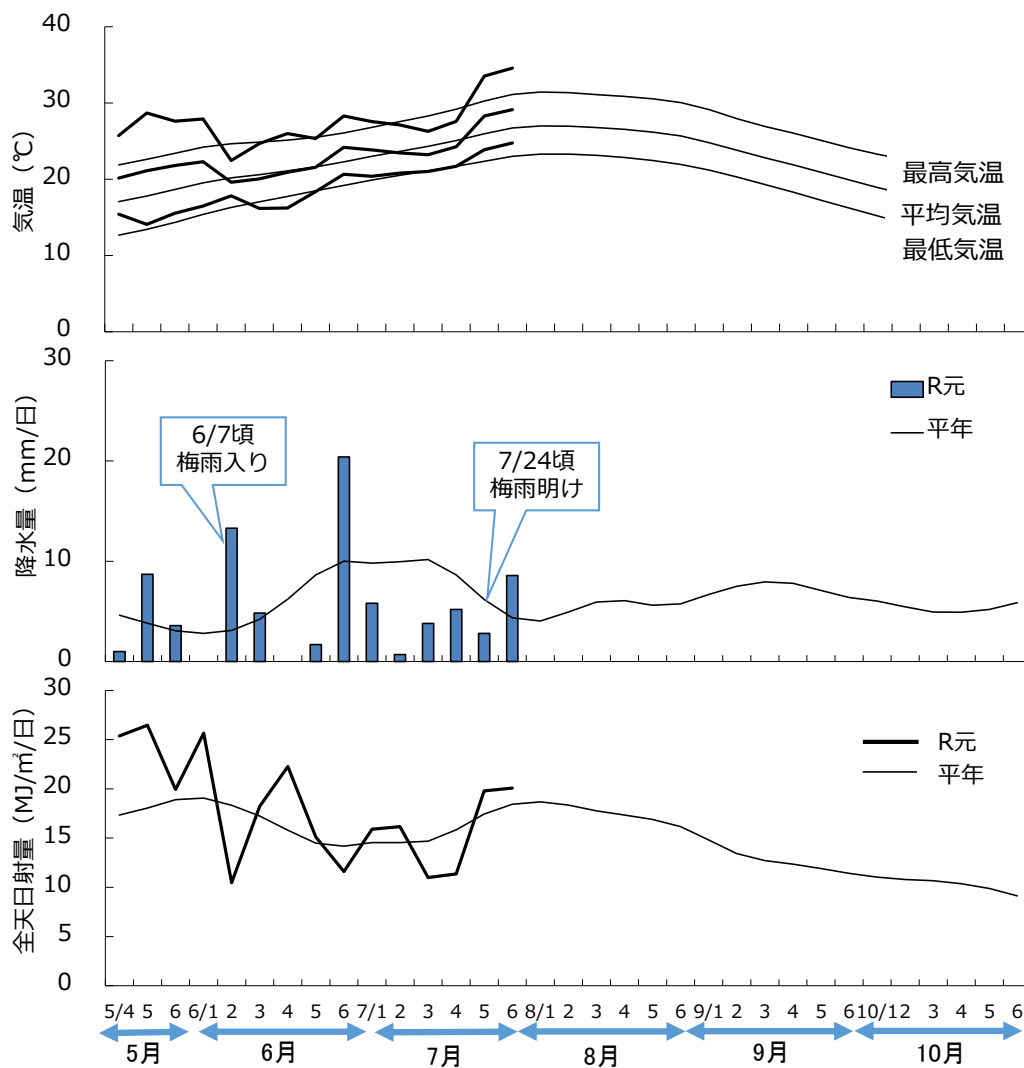


図1 大豆生育期間の気象経過 (富山地方气象台)

## 2 生育経過（生育観測ほ）

### (1) エンレイ

- ・単作は、主茎長 69.2cm、本葉葉数 12.9 葉、一次分枝数は 1 株あたり 1.6 本であった。  
 平年に比べ主茎長、本葉葉数は並み、一次分枝数は 1 株あたり 0.4 本少なくなっている。
- ・麦跡は、主茎長 71.5cm、本葉葉数 11.9 葉、一次分枝数は 1 株あたり 2.1 本であった。  
 平年に比べ主茎長はかなり長く、本葉葉数はやや多い。一次分枝数は 1 株あたり 0.1 本多くなっている。
- ・開花期は単作で 7 月 20 日と平年より 3 日遅く、麦跡は 7 月 22 日と平年より 2 日早くなった。

### (2) シュウレイ

- ・主茎長 68.9cm、本葉葉数 11.7 葉、一次分枝数は 1 株あたり 3.0 本であった。
- ・開花期は、7 月 24 日となった。

表 1 大豆生育観測ほ調査結果（8 月 1 日調査）

		播種月日 (月/日)	栽植本数 (本/㎡)	生育調査(8月1日)			開花期	
				主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本/株)		
エンレイ	単作	R元	5/29	17.4	69.2	12.9	1.6	7月20日
		H30	5/31	17.3	72.1	12.5	1.3	7月18日
		平年	5/30	16.1	72.5	12.5	2.0	7月17日
		平年比(差)	-1	108	95	0.4	-0.4	3
	麦跡	R元	6/3	17.3	71.5	11.9	2.1	7月22日
		H30	6/9	16.9	57.3	11.6	2.3	7月23日
		平年	6/10	16.7	58.8	11.0	2.0	7月24日
		平年比(差)	-7	104	122	0.9	0.1	-2
シュウレイ	R元	6/8	15.1	68.6	11.7	3.0	7月24日	
	H30	6/8	15.3	54.8	11.2	2.3	7月24日	
	近年	6/6	15.3	64.7	11.5	2.7	7月23日	
	近年比(差)	2	99	106	0.2	0.3	1	

注1) 調査ほ場数: 単作エンレイ(5ほ場)、麦跡エンレイ(3ほ場)、シュウレイ(単作1ほ場、麦跡2ほ場)

注2) 本葉葉数は、H22以降は0.5葉刻み、それ以前は0.1葉刻みの測定による平均

注3) 平年値はH21~H30、シュウレイの近年値はH22~30の平均

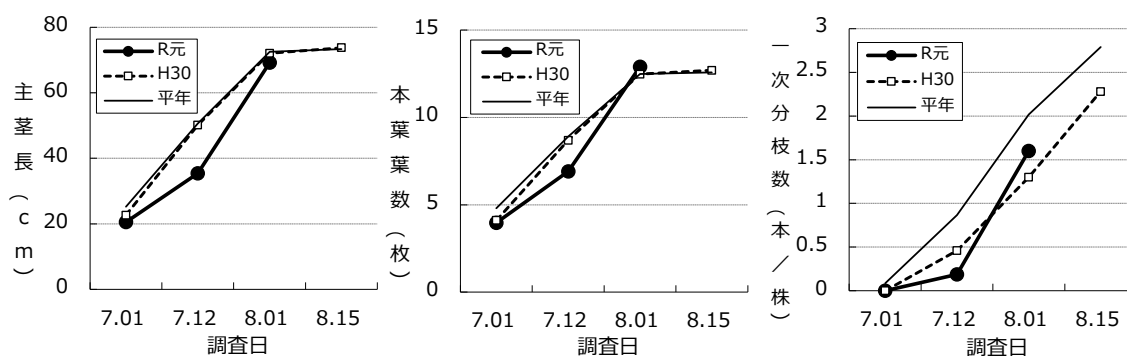


図 2 単作エンレイの生育の推移

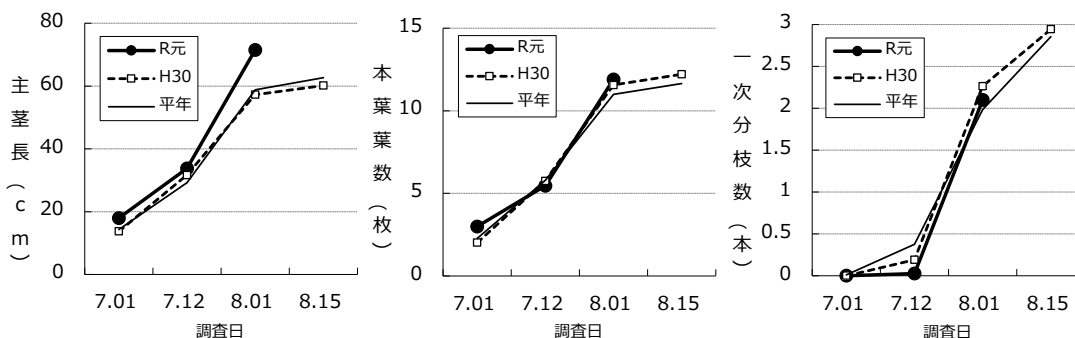


図 3 麦跡エンレイの生育の推移

### 3 当面の技術対策

- 今後、平年より気温がかなり高く、降水量が少ない見込みであることから、3日以上晴天が続いた場合は、土壌の乾き具合に応じて積極的に畦間かん水を行う。
- 溝の手直しや連結、排水口の掘り下げを確実にを行う。
- 紫斑病及びカメムシ類の2回の基本防除を徹底する。また、ウコンノメイガやハダニ類などの発生状況を確認し、多発生ほ場では防除を徹底する。

#### (1) 莢数の確保に向けた畦間かん水の実施

- ・開花期頃からの水分ストレスは、収量・品質の低下を招くので、9月上旬頃までの期間、3日以上晴天が続いた場合は、土壌の乾き具合に応じて畦間かん水を行う (図4、図5、図6)。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら水口を止めて速やかに排水する(水を溜めたままにしない) (図7)。

#### (2) 入排水路の手直しと確実な連結

- ・畦間かん水時の入排水や降雨後の排水をスムーズにするため、溝の手直しや連結、排水口の掘り下げを確実にを行う。

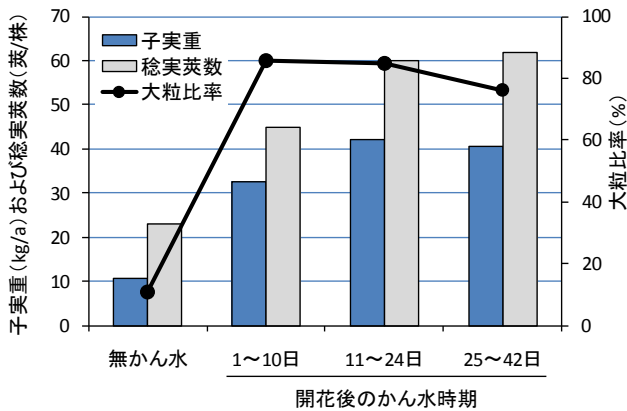


図4 かん水時期と収量の関係 (H14 農試)

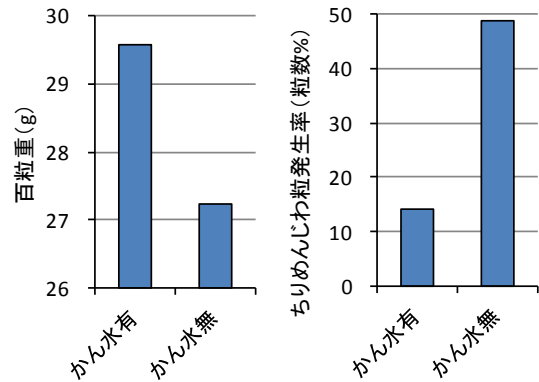


図5 かん水の有無が百粒重やしわ粒の発生に及ぼす影響 (H24 富山農振セ)  
注) かん水有区: 2回かん水実施



図6 茶色いしみ状斑紋粒

子実肥大期以降の高温と土壌乾燥により発生

ほ場全体に水が行き渡ったら、速やかに排水する。



図7 畦間かん水

(3) 適期の病虫害防除 (表2、3)

- ・ウコンノメイガ：生育が旺盛で葉色が濃いほ場では、幼虫による葉巻が多くなるため、防除要否判定に従い、8月上旬まで（若・中齢幼虫期）に遅れず実施する。
- ・カメムシ類：主な加害種はホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシで、多発生ほ場では青立ちの発生要因となる。薬剤防除は、莢伸長期～子実肥大中期に2回行う（紫斑病との同時防除）。なお、山際等の常発地域では、発生状況に応じて追加防除を実施する。
- ・ハダニ類、ハスモンヨトウ：ハダニ類による葉の黄化やハスモンヨトウによる白変葉がみられたら、被害葉を速やかに取り除き、ほ場外で処分し、被害の拡大を防ぐとともに、発生状況に応じて薬剤を散布する。なお薬剤は、葉の裏に十分かかるように散布する。

表2 生育期における大豆害虫の調査観察時期と防除要否判定の目安

調査・観察時期	対象害虫	防除要否判定の目安	防除時期など
7月6半旬～8月1半旬	ウコンノメイガ	大豆1株当たり平均葉巻数が6個以上	8月上旬まで
7月下旬～	ハダニ類	ハダニ類による葉の黄化が見られたら	黄化葉の除去 随時防除
8月中下旬～	ハスモンヨトウ	若齢幼虫による白変葉被害見られ始めたら	白変葉の除去 随時防除

- ・紫斑病：2回の基本防除（8月2～3半旬頃と4～5半旬頃）を徹底する。また、散布の際は、同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分付着するようにする。
- ・葉焼病：発生が認められたら、Zボルドーなどで防除する。

表3 大豆生育期の防除体系及び基本防除時期

		7月		8月			9月
		中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
単作大豆 生育ステージ		開花		1回目防除	2回目防除		
		莢伸長期 /			子実肥大期		
薬剤 防除 時期	基本			紫斑病 カメムシ	紫斑病 カメムシ		
	随時	葉焼病 ウコンノメイガ ハダニ類		ハスモンヨトウ		カメムシ フタスジ ヒメハムシ	

(4) 早めの雑草対策

- ・雑草が残っている場合は、雑草の種類や葉齢に応じて除草剤を適切に使用する。また、株間に残った大型雑草は、雑草が結実する前に防除（手取り、除草剤塗布）する。
- ・帰化アサガオ類やイヌホオズキ類等の難防除雑草の発生に注意し、雑草が結実する前に防除（除草剤散布、手取り、地際からの刈取り）を徹底する。また、水田周辺等も含め防除するとともに、防除後も再度雑草が発生することがあるので、継続的に防除する。